

# 静岡県言語・聴覚・発達障害研究

第57号

(令和7年3月)



静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会



【 目次 】

◇ あいさつ	会長 静岡市立番町小学校長 石原 鉄也	1
1	静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会内容	2
2	講演内容	3
3	分科会	
	【第1回】	
	<b>構音障害</b> (東海四県大会 発表)	5
	「正しい音を出すために努力してきたこと」～大切にしてきたこと、心掛けてきたこと～ 発表者 浜松市立葵が丘小学校 河合城聖	
	<b>言語発達遅滞</b> 情報交換	12
	「アセスメントについて考える」 情報提供者 静岡市特別支援教育センター 永野理江子	
	<b>吃音</b> 情報交換	22
	「吃音理解を周囲に広める」「吃音児童同士でペア学習」 情報提供者 三島市立西小学校 永井真由	
	<b>学習</b> 情報交換	25
	「LD傾向(読み書き計算)をもつ子どもへの指導・支援のあり方」 情報提供者 浜松市 立可美小学校 南谷由香	
	<b>行動</b> 情報交換	28
	「セルフアドボカシーと自己理解」 情報提供者 藤枝市立岡部小学校 宇治原 裕	
	<b>難聴</b> 情報交換	30
	「難聴通級での指導」 情報提供者 富士宮市立東小学校 佐藤 里 アドバイザー 静岡聴覚特別支援学校 杉山 実	
	【第2回】	
	<b>聞く</b> 情報交換	33
	「音を聞く・話を聞く～Aさん(側音化構音)との関りを通して～」 情報提供者 菊川市立 小笠北小学校 丸山啓作	
	<b>話す</b> 情報交換	36
	「思いがあるけど話せない～困っていることを伝えられない子への指導・支援の在り方～」 情報提供者 島田市立島田第四小学校 吉永健夫	
	<b>読み書き</b> 情報交換	38
	「ことばの教室での『読み』の指導」 情報提供者 浜松市立葵が丘小学校 金原千晴	
	<b>コミュニケーション</b> 情報交換	41
	「ASD児のアセスメント」 情報提供者 静岡市立服織小学校 大村亮輔	
	<b>連携</b> 情報交換	42
	「より良い連携の在り方について考える」 情報提供者 伊東市立伊東小学校 植松実木	
	<b>思春期</b> 事例検討	45
	「応用行動分析を取り入れたASDの生徒への支援」 事例提供者 三島市立北中学校 岩本 康子	
4	各地区研修報告	
	静東地区	47
	静岡地区	52

静西地区	55
浜松地区	59
◇ 編集後記	研究部 64

## あ い さ つ

静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会  
会長 石原鉄也

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が小さくなり、各学校・園においても以前の教育活動がほぼ制約なしに行われるようになってくる中、国を挙げてICT教育の推進や働き方の改革等が強力的に推し進められ、教育の在り様が大きく変わり始めています。また、教育施策として、Well-Beingを目指すとうたわれ、私たち教育関係者は、子どもたちの幸福の追求が課せられました。子どもたちの生きていく社会を見据え、新しいことを取り入れることは必要です。その一方で、それが、子どもたちにとって「本当に大切か、本当に必要なものか」という視点で指導に当たる専門家の私たちが正しく見極めなくてはならないと強く感じます。

さて、静言研は各地区の協力体制を強化し会員一人一人が主体的に参加しやすい研究会とするため組織や運営を見直し、4地区体制、定例研を2回に変更し、新たにスタートしました。例年の様に定例研修会や地区講習会等に多くの会員が積極的に参加し、各地区の取組について情報交換を行い、各会員の指導力を高めることができました。特に5月と11月の定例研では、2回とも300人を超える参加があり、分科会では、実践発表を基に熱心な意見交換が行われました。今年度も運営にあたった静西、静東の担当者の皆様には、対面とオンラインを組み合わせた参加者の意向に沿った方式で定例研を行っていただき、大変好評を得ました。実施にあたり前年度からご尽力くださった皆様には、心より感謝申し上げます。また、多くの方々のご参加により、充実した学びの場になりましたこと、改めてお礼申し上げます。

現在直面している課題は、幼児言語教室、通級指導教室の対象の幼児・児童生徒数の増大とそれに対応する教室・指導者数の不足。急激な世代交代に伴うスキルの継承や計画的な人材育成。専門性を高める研修体制の確保等が、挙げられます。それら多くの課題を解決するため、先人から受け継いだよさは残しつつ、静言研を持続可能な組織へと改編を続けています。

来年度も事務局として、会員皆様の声をもとに静言研として進むべき方向を確かめ、各市町及び県の担当部所に働きかけていきます。そして、各自治体のご理解を得ながら、幼児言語・通級担当者が本来業務である指導に専念でき、幼児・児童生徒一人一人のニーズに適した指導ができるように力を注いでいきたいと思っております。今後も皆様のご理解ご協力をお願いいたします。

最後になりましたが、皆様の本会の活動につきましての献身的なご尽力に感謝申し上げますと共に皆様のご健康を祈念いたしまして、あいさつとさせていただきます。

## 令和6年度 静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会 内容

### 1 定例研修会

#### (1) 第1回定例研修会

令和6年5月17日(金)

会場：掛川生涯学習センター

講演：対面とZoomによる配信

分科会：対面での実施

「構音障害」「言語発達遅滞」「吃音」「学習」「行動」「難聴」

#### (2) 第2回定例研修会

令和6年12月5日(木)

会場：三島市民文化会館

講演：対面とZoomによる配信

分科会：対面での実施

「話す」「聞く」「読み書き」「コミュニケーション」「連携」

「思春期」

### 2 新任者研修会

各地区にて実施。

詳細は各地区研修報告参照

### 3 県内各地区での研修会

各地区での状況に合わせた実施

詳細は各地区研修報告参照

### 4 研究会誌作成

### 5 会報『えがお』発行

静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会ホームページに掲載

## 令和6年度 定例研修会 講演会

### 【第1回】

令和6年5月17日（金）

会場 掛川市生涯学習センター

演題 「LDの自己調整力と学習支援」

講師 後藤 隆章 先生

横浜国立大学 教育学部 学校教育課程 特別支援教育 准教授

特別支援教育の目指すところは人格の形成である。そのために、自己調整学習理論をもとにしてLD傾向をもつ子への指導の在り方を考えていく。

LD傾向をもつ子は、全般的な知的発達に遅れはないものの、読み書きのような特定のものの習得と使用に著しい困難を示す。それが、予見段階においては学習方略の乏しさや目標設定の曖昧さがあり、遂行段階では持続性の困難さが見られる。その結果として自己内省段階においては不適切な自己評価につながり、その子の困難さを生んでいる。そのため、リスク低減できるような手続きをとることで、「できた」という体感を感じさせ、そこから課題と向き合う意欲、失敗に対する抵抗力（レジリエンス）を高めることができる。それがひいては人格の形成（完成）につながるものである。

※対面での実施に加えて、Zoomでの配信も実施した。会場に来ることができない会員でも、講演は聞くことができ、研修の機会が広がった。

### 【第2回】

令和6年12月5日（木）

会場 三島市民文化会館

演題 「通級指導教室での支援のあり方—ことばの支援を中心に—」

講師 村瀬 忍 先生

岐阜大学 教育学部 教授

通級の指導で大切なことは、その子のもてる力を発揮して、生き生きと過ごせる環境を自分で作り出す力を身に付けさせることである。そのために、通級担当者は、子どもに、存在を肯定する言葉掛けや達成感を積み重ねさせながら、役立っている感や自信を持たせることが大切である。さらに、困難さの背景や対策、経過を、関係する機関と連携しながら進めていき、子どもが、自分の特性を理解し、支援の具体を相手に伝えられるようにすることが重要である。

※今回も、対面での実施に加え、Zoomでの配信も実施した。第1回同様に、研修の機会を広げ、会員の知識を向上することができた。

令和6年度 第1回定例研修会 「構音障害」分科会 記録

テーマ 「正しい音を出すために努力してきたこと」  
～大切にしてきたこと、心掛けてきたこと～

発表者 浜松市立葵が丘小学校 通級指導教室（言語）担当

教諭 河合城聖

1 発表者より発表

- ・実態把握
- ・柔軟な練習メニュー
- ・継続的な舌運動
- ・聞く力を養う



2 質疑応答

○耳の訓練について

- ・目標の音を聞き出し音の特徴を知る。→分解し正確に聞き分ける。→担当者の音の聞き分け→自分の音を自分で直すことができる。
- ・段階を踏んで行うこと。

○音を出すためのメニューの工夫

- ・風船を手でつきながら「カ」の練習。スーパー袋で包むとよい。
- ・スティックゲームで、棒を引きながら「スー」の練習。

○今日のプログラムの作成

- ・子供と相談して決める。子供によって。
- ・自分から提案できる子もいる。
- ・「今日何やる?」「今日がんばること」を明確にし、共有する。

3 協議

○実態把握について

- ・聞く努力。内面も含めて聞き取ることで、指導がスムーズになる。
- ・背景や生育歴を把握することと、指導の中での実態把握をしていく。

○柔軟な練習メニューについて

- ・指導の基本順の固定概念を、子供の実態から柔軟に変更する勇気。
- ・子供に聞く。こどもの何気ないことばや気づきを拾う。
- ・指示は子供に伝わるように明確に出す。「次はこれ。」

○継続的な舌運動について

- ・鏡の活用。基本を大切に。体幹を鍛える。
- ・お菓子は有効。楽しみながら意欲を引き出せる。
- ・繰り返すことで、できたことの可視化を図る。

○聞く力を養うことについて

- ・ターゲットの音の特徴をつかませるために、音を聞き出す練習。
- ・担当者の聞く力も重要。誤りだと分かること。
- ・特徴の強い部分のみに特化せず、聞き漏らしや見落としをしない。

4 発表者より

- ・やってみることで、振り返ることができた。気づきもあった。
- ・東海四県の発表に生かしたい。





令和6年度 第1回定例研修会 「言語発達遅滞」分科会 記録

情報交換 「アセスメントについて考える」

情報提供者 静岡市特別支援教育センター内幼児言語教室担当

永野理江子

1 担当者より話題提供・事例紹介

2 質疑応答

○発表者の永野先生の役職は？

・会計年度任用職員である。言語教室担当となって6年目になる。

○静岡市特別支援センターとは？

・静岡市教委学校教育課内の特別支援班内にある。①幼児言語教室②就学相談③就学支援員会など、市内の特別支援教育を集約している。

○電話相談から入級決定までの期間は？

・おおよそ一か月ほど。

○問題行動要因の見立ての共有は？

・見立てによっては一致しないケースもある。入級に関して公平性が保てるよう留意しながら入級運営をしている。

3 グループ協議（17グループに分かれ話し合い、全体の場で発表）

○担当者からの話し合いの柱の提案

・それぞれの市町において、

①対象児の実態把握をどのように行っているか。

②入級までにはどのような経過をとるか。

○グループで話し合い、全体の場で発表

・アセスメントは指導上重要性が大きい。書類の読み込みが大切。

・アセスメントは入級時だけでなく、指導開始後にも何度も行うことが必要。

・市町によって入級までの過程は様々である。

A市) S Tが判断する。

B市) 在籍園から入級申込みをする。

C市) 年に6～7回の審査会がある。

保護者からの相談→通級担当者会→審査会へ。

幼児と学齢の教室が併設。お互いに実態を把握する。

D市) 基本は年2回の審査会だが随時行う。入級基準あり。

E市) 保護者が園へ相談。園からことばの教室設置園へ依頼。

F市) 保護者が子育て相談課へ申し込む。

G市) S Tがいる課へ保護者が相談する。

H市) 年中時1月に市内一斉4歳児検査実施。

I市) 入級判断を教室担当が行う。

J市) S Tが検査を行う。5歳時検診。

○担当者からの感想



令和6年度 第1回定例研修会 「吃音」分科会 記録

情報交換 「吃音理解を周囲に広める」「吃音児童同士でペア学習」  
情報提供者 三島市立西小学校 通級指導教室（言語）担当  
教諭 永井真由

1 担当者より話題提供・事例紹介

- 提案1 「吃音理解を周囲に広める」
- 提案2 「吃音児童同士でペア学習」

2 質疑応答

- 実践事例にある「吃音のお悩みBOX」の使い方について
  - ・ 常時、待合室に設置して、指導の日に質問があるかどうかを確認している。
- グループの指導についての情報収集
  - ・ 他校の吃音対象児童と時間や曜日を合わせることができず、まだ実施はできていない。
- ペア指導についての始め方と進め方
  - ・ 指導児童から希望が出たため、通級している吃音対象児に声かけをして、1名許可を得ることができた。その子と時間を合わせて実施。子供だけではなく、保護者にも相談をしながら進めた。

3 グループ協議（5グループに分かれ話し合い、全体の場で発表）

- 「吃音理解を周囲に広める」には
  - ・ 4月に通級説明会を実施し、市内の学校から1名代表者に来てもらい、通級や言語障害の吃音についても説明する時間をとっている。
  - ・ 特別支援学級や通級について、全校放送で共通理解を図るための時間をとっている。
- 「吃音児童同士でペア学習」について
  - ・ ペア学習の成果：吃音で困ることや、どんな時にどもりやすいのか子供たち同士が話せたことが安心に繋がった。
- 各グループから発表
  - ・ 過去の吃音指導の実践について、様々な意見が出された。

4 発表者から感想

- ・ 吃音指導についての様々な情報を得ることができてよかった。皆さんの実践をヒントに、吃音理解を進めていきたい。
- ・ また、ペア学習についての情報も集めていきたい。





令和6年度 第1回定例研修会 「学習」分科会 記録

情報交換 「LD 傾向（読み書き計算）をもつ子どもへの指導・  
支援のあり方」

情報提供者 浜松市立可美学校 通級指導教室（LD 等）担当

教諭 南谷由香

1 担当者より話題提供・事例紹介

○情報交換をし、新しいことを知ってもらう対話重視の分科会とする。

○話題提供

- ・5年男児：一人で行うと時間がかかるが、理解することはできている。  
しかし、自分一人では力が発揮できない。

・通級指導内容

読解力を伸ばすための書籍参考

読むこと：内容理解・意味理解・文章理解

書くこと：メモを取る

『聞いて→書く（メモ）→伝える』

四則計算：九九表入りプリント・筆算プリント



2 質疑応答

○通級の目標の立て方

- ・学校からの主訴を通級の目標としているのか、通級での実態を目標にしているのか。
- ・表れと実際の困り感は違う場合がある。
- ・学校・家庭・通級で実態を把握し、三者で共有していく必要がある。

3 グループ協議（9グループに分かれ話し合い、全体の場で発表）

○目標のたたせ方・指導の仕方

小学校

- ・目標設定に関しては、目標があつてからの通級、もしくは、通級での実態を見てからの目標設定と様々である。
- ・どんなやりとりがあつて通級に繋がっているのかをしっかりと把握し、その後の在籍校との連携が大切である。
- ・個に合った課題設定をし、「やってみよう」という思いにさせる。
- ・子供の想いを大切に目標設定。自分に合った方法が選べる。
- ・アセスメントや見立てが大切。

自信・やる気・意欲

中学校

- ・受験との絡みがあり、配慮事項や出口を明確にしておく必要がある。また、教科の先生方の理解も必要。
- ・本人がやりたい物を見つけ、成功体験を大切にし、学ぶ意欲を保つ。

4 担当者より

- ・発表は30分のみであり、残りの2時間は参加者が主役の分科会であったが、多くの意見が出て充実した研修となった。

## 令和6年度 第1回定例研修会 「行動」分科会 記録

情報交換 「セルフアドボカシーと自己理解」

情報提供者 藤枝市立岡部小学校 通級指導教室 (LD等) 担当

教諭 宇治原 裕

### 1 担当者より話題提供・事例紹介

### 2 質疑応答 (なし)

### 3 グループ協議

#### ○セルフアドボカシーの提案・情報提供を受けての話し合い

- ・ 7つのグループに分かれて活発な情報交換がなされた。
- ・ A小学校では、4年生グループ4人に対して、4人の教師が担当につく。その教師4名がロールプレイを行って子供に考えさせた。(喧嘩して謝るという場面) ロールプレイのシナリオは、子供たちの実際の生活場面をヒントにして作成した。
- ・ B小学校では、担任から子供に関するエピソードを聞き、「場面絵」を作成して子供に考えさせる実践をした。(個別)
- ・ C小学校では、「気持ちチップ」という教材を担当者・支援員・子供の3人で行い、チップを置いた理由も聞くことにした。場面に対しての自己理解になるが、他者理解にもなる。支援員がいないところは、母親と一緒にやってもらう方法もあるという意見が出された。
- ・ このほかにも「なかよしチャレンジ」や「はあっていうゲーム」なども有効なのではないかという意見が出された。

#### ○発表を離れての情報交換

- ・ 市町によって、指導形態、入級審査の方法、入級の時期などに違いがあること、発達通級が一人担当なのか複数担当なのかなど活発な話し合いが展開された。
- ・ A市は、個別とグループの両方を行っている。複数担当。入級の機会は、4月、6月、7月、10月などがあり、10月は主に来年度の通級についてである。診断のある子が多いが、専門家の推薦もある。
- ・ B市は、年2回の審査を行っている。
- ・ C市は、年1回専門家チーム会議で審査を行っている。

### 4 担当者より

- ・ 自己理解というのは、大人でも難しい。まずは、担当者・担任・親の理解から進めていく必要がある。
- ・ 「場面絵」や自作のロールプレイによって自己理解を深めていく方法もある。
- ・ グループ指導をやっている担当者の数を確認したら思ったより多くの人がやっていることが分かってよかった。
- ・ 活発な話し合いができてよかった。





令和6年度 第1回定例研修会 「難聴」分科会 記録

情報交換 「難聴通級での指導」

情報提供者 富士宮市立東小学校 通級指導教室（難聴）担当

教諭 佐藤 里

アドバイザー 静岡聴覚特別支援学校

教諭 杉山 実

1 担当者より話題提供・事例紹介

2 質疑及び協議

○みみの教室でどんなことをしているのか。

- ・聞こえ方を通常担任に伝え、クラスの児童に難聴児の理解を広める。
- ・児童を受容し、居場所を作ること。
- ・自己理解（自分探し）を進めることも大切である。

○大きな数の聞き取りが難しいのはなぜか。

- ・音域が似ていて、口型で区別しにくい、ワーキングメモリーの低さから一般的に苦手としている子が多い。視覚動作や筋肉動作で覚えやすくなる場合がある。

○語彙学習は何をすればよいか。

- ・慣用句、ことわざ、四字熟語、絵本、新聞の易しい記事を取り上げる。
- ・体験が大事。意味ネットワークを広げる。
- ・幼児は遊びの体験から学ぶ。体験を実況すると身に付きやすい。。
- ・保護者を巻き込む。日々のかかわりの中で親が意識することで変わる。
- ・語彙力、意味が分かる力がある子は伸びるだろう。コミュニケーションとして音だけでなく意味理解が大切になっていく。

○日常の何気ないことの理解が難しい。（例：今日・明日）

- ・ここが難聴児の難しさであり、学校で教えていくことである

○聞き取りの難しさ。

- ・中～最重度の児童。いつも口元を見せて指導する。  
あえて口元を隠して聞き取りの指導もしていく。

3 アドバイザーより

- ・聞こえの仕組み
- ・言語指導について
- ・APDについて





情報交換 「音を聞く・話を聞く ～Aさん（側音化構音）との関りを通して～」

情報提供者 菊川市立小笠北小学校 通級指導教室（児童言語）担当

教諭 丸山 啓作

#### ○グループでの情報交換

・Aグループ 大人は自声音を認識しているが、幼児は自分がしゃべっている音を認識できない。その差を埋めるのに、自分の声を録音して聞かせる。「今、こう聞こえたけれど、どう？」等。口を動かすトレーニングとともに、相手に自分の思いを伝える楽しさ、話す意欲を育てるのが大事。

・Bグループ サ・ザ行音が改善すると、歪み音も改善するケースがある。遊びを通して幼児は指導している。歪んでいても、話の内容が分かってもらえて伝えられればいい。幼児は発達障害と併せ持つことの見極めが難しい。

・Cグループ 聞き取りは不十分なところがある。動画を撮る、ボイスメモの活用、iPad、音声をゆっくり再生するなどをして対応をしている。発音に、コロナ禍でのマスク生活の影響が出ているように思う。

・Dグループ フィードバックの重要性を感じる。音を聞かないと治らないし、音を聞いているから変わっていくので、自分で自分の声を聞かせて、正誤弁別している。側音化構音にみられる「口角の引き」はiPadで録画して確認している。

・Eグループ 音を聞き取る方法はiPadなど、呼気や口形と舌の動きは、鼻息鏡、ペンライト、真似、専門家に聞く、鏡を見て練習などをしている。子どもの困り感は九九がうまく言えない、書き言葉が不自然になる、みんなの前で言うことなど。側音化は「ちきゅう」「ききゅう」の言い分けができればいい、としている。

・Fグループ 難聴で高い音が聞こえないと「シ」に影響し、低い音が聞こえないと「ダ」に影響する。「スピーチバナナ」は有効で、検索して知ってほしい。ブローイングが構音指導には重要。側音化終了の目安は本人や家族が気にならなければ終了。

・Gグループ 側音化は自分の音を聞き分けられないとできない。iPadは指導が進まない子に有効だと思う。

・Hグループ 側音化構音は多いし、親も気が付いていないことが多い。舌のトレーニングが大事。録音したものを聞く。幼児の指導は難しい。教師の音を聞かせて○×クイズをする。

令和6年度 第2回定例研修会 「話す」分科会 記録

情報交換 「思いがあるけれど話せない

～困っていることを伝えられない子への指導・支援の在り方～

情報提供者 島田市立島田第四小学校 通級指導教室 (LD等) 担当

教諭 吉永 健夫

○情報交換で出た意見

①思いがあるけれど伝えられない子に対する具体の事例について

- ・気持ちを整理する言葉が少ない子には、気持ちチップ（表情）を使って言語化したり、気持ちにラベリングをしたりする。「ハル君の気持ちカード」は、気持ちの言葉も書いてあるよさがある。又、活動や出来事ごとに気持ちを数値化するのも有効。
- ・受け答え自体が難しい場合には、まずは「Yes/No」で答えられるような簡単なものから始め、5W1Hや順序を表す言葉も取り入れながら受け答えができるようにする。
- ・単語でしか話さない子には、担当者が言葉と言葉を繋げたり、言いたいことを引き出したりしながら、文章で表現できるようにしていく。
- ・絵や図で示すことや、動作化を取り入れ、設定場面やそのときの心情の理解を促す。
- ・困ったときに使えるきっかけの言葉（友達には「ねえねえ」、先生には「あの～」など）を教えることで、自分から話しかけやすいようにする。又、教師同士で助け合う姿を見せることや、教師自身が弱みを見せ子供に助けを求めることもモデルとなってよい。
- ・思いを伝える様々なツールを担当者自身が開拓し伝えることで、子供が取捨選択、活用できるようにしたい。



②「話す」こと全般の事例について

- ・コロナ禍を経て、両唇音が出ない、聞き取れない等の発音に困難を抱える子供が増加した。また、口腔機能だけではなく、体自体の不器用さや様々な経験の乏しさも目立つようになったように感じる。
- ・不登校に繋がるケースもあることから、その子に合ったコミュニケーションの手段を教え、表出できるようにすることが大切。
- ・エピソードとして語れない子には、「何?」「どうした?」と問いかけても答えづらい。これは聞き方に問題があり、もっと範囲を狭めて問うとよい。
- ・個別指導のよさを最大限に生かし、子供の好みや興味、必要性に応じて指導する。
- ・機嫌を損ねているときにはプレイルームで体を動かし、落ち着かせてから指導に入るようにする、話題の多いカードゲームや協力型ゲームを取り入れる等、リラックスして指導に臨めるようにする。
- ・グループワークの効果は大きい。他にもこんな子がいるのだと安心材料になる。
- ・緘黙の子供には柔軟な対応をする。母親とは話せるなら同席する、筆談で、等。「話す」が全てではなく、それよりも「伝えたい」という意欲を高めることが重要。
- ・吃音で通っている子は、一生の付き合いになることがほとんど。幼児期は、語彙が増え、たくさん話すようになる時期ゆえのものもあるため、吃音の見極めは難しい。
- ・幼小、小中の連携、そして言語と発達の通級は同じ場所にある方が研修は深まる。

通級のよさを生かして子供一人一人に寄り添い、たくさんの「好き」や「楽しい」を共有することで、通級が子供たちにとって安心できる場所、その子らしく居られる場所となる。そうした土台作りが、「思いを伝える意欲」を高めていくことに繋がるだろう。

情報交換 「ことばの教室での『読み』の指導」

情報提供者 浜松市立葵が丘小学校 通級指導教室（児童言語）担当

教諭 金原 千晴

### ○情報交換で出た意見

\*金原先生の情報提供を基にして、小グループでの情報交換を行った。

#### (1) 通級教室での具体的な指導について

- ・宿題について：宿題を出すには、「自分で正しい音が出せる」「自分の耳で聞いてその判定ができる」など前提条件の整備が必要。
- ・「読む」ことについて：子どもの気持ちや「読んだらできた」という便利さを感じる事が大事。好きな題材やその子が読みたくなる題材など、その子の興味を活かした活動はとても効果がある。
- ・しりとりができない子：絵本「リンゴリラッパ」を利用。まずは3語だけ。語彙を増やす。絵しりとりなど。
- ・音韻を育てる支援：音韻すごろくや絵カードのマッチングなど、音韻を育てる支援を幼児の時からやっておくと、学齢でもとても有効。
- ・読みについて：聞き分けができていない子は難しい。そういう子には、まず耳を鍛える。
- ・読みのゴール：家庭環境を加味して考える。特殊音節が読めたらゴール。
- ・工夫して言う教材：パタタ星人、絵カードを使う、言葉の並び替え、カタカナマシーン
- ・「読み書き」指導でやっていること：
  - ・教科書には、読みやすい書き込み（車線や囲みなど）をなるべくたくさんしている。
  - ・毎時間の来室時に、教科書の音読をさせて確認している。
  - ・ひらがなカードで言葉作り。
- ・ICT機器の活用：こちらとしては配慮してあげたいが、配慮が特別扱いになってしまうという本人や周りの気持ちをどうしていくかが問題。



#### (2) その他

##### ○各市町での状況について：

- ・入級について：入級までに担当が多くの検査をやるところもあれば、市のSTが全部判別するところもある。また、途中入級あり・無しなど市によって様々。
- ・通級期間について：焼津市では2年間という決まりがあるが、他の市は期限がない。ゴールをどこに焦点をあてていくのかというのが難しい。
- ・MIMがことばの教室がある学校に配布されている市もある。

##### ○中学校のLDの子供の指導について：

- ・高校受験でもらう配慮は、中学校でやってきた配慮がベースになっているが、高校によってやらないところもある。
- ・中学校で配慮をお願いしても、結果的に成果が出ないこともある。通常学級の先生に理解してもらうのが難しい。



##### ○他機関との連携について：

- ・書けない子について、聞き間違いなのか、構音の問題か、音韻なのか、自分だけでアセスメントするのは難しい。他機関との連携の必要を感じる。
- ・構音指導について、「ことばの教室でできることは何か？」を考えたときに、「本人に困り感がなく、周りからも話が通じていれば、それでいいのではないか。」と思う。気軽に聞ける相談機関があるといい。そういうつながりがほしい。

事例検討「ASD児のアセスメント」

事例提供者 静岡市立服織小学校 通級指導教室（発達）担当

教諭 大村 亮輔

○事例検討で出た意見

- ・通級に通うことで対象児の表れがとてよくなっているの、これまでの指導の積み重ねがすばらしい。
- ・愛着の課題もありそうなので、そういった視点も加味して対応していく。

<女子と仲良くしたい>

- ・通級の個別の時間に身に付けた力（聞く力・話す力など）をグループの指導で使えるように指導をする。
- ・人と関わってよかった経験を積めるようにする。
- ・一人でもよい、男の子の友達でもよいという様々な価値観にも触れていきたい。
- ・ソフトな関わりをしてくれる友達や自分を許容してくれる先生との関係がよく、強井タイプの人とは合わないなど相手によるという点から、再度アセスメントをし直してみることも必要ではないか。

<厳しく注意することを減らしたい>

- ・スルースキルのトレーニングを積む。
- ・担任と連携を図り、大人が間に入りながらスモールステップで学べるようにする。

小さなことでもできたことを褒めていく。

- ・実際の場面での振り返りをする。



## 令和6年度 第2回定例研修会「連携」分科会 記録

情報交換 「より良い連携の在り方について考える」

情報提供者 伊東市立伊東小学校 通級指導教室(児童言語)担当

教諭 植松 実木

### ○ 話題の柱

(1)連携ファイル(ノート)の内容や交換方法について

(2)各関係機関との連携について(幼児ことばの教室・中学校発達通級教室・医療等)



### ○ 情報交換で出た意見

(1)連絡ファイル(ノート)の内容や交換方法について

- ・東部の通級指導教室で使われている連絡ファイルを参考に話をした。内容については、学習内容、指導の意図、子供のよかった表れ、本人が困っていること等を記入している方が多かった。
- ・幼児では実際に保護者と会う機会が多いので、指導内容を口頭で話したり、指導公開を設けたりしていた。
- ・ICT を使いクラスルームに担任、保護者、子供を招待し、スプレッドシートを活用してお互いに記入できるようにしていた。
- ・交換方法については、他校通級の場合に在籍学級の担任との連携が難しいという問題があった。また、不登校の子供やファイルを保護者に出し忘れてしまう子供の保護者・学校・家庭との連携が難しいとの話が出た。ファイルが回らない子供には家庭連絡や在籍学級の先生に電話やメールで連絡を取ったり、コピーして子供に渡したりする改善点も出された。
- ・管理職にも連絡ファイルを見てもらうことで、通級指導教室の実態を知ってもらうことも大切だという話だった。

(2)各関係機関との連携について(幼児ことばの教室・中学校発達通級教室・医療等)

- ・言語や聴覚の専門担当が少なく、地区講習会に言語聴覚士の方を呼ぶことができない問題があった。市や町によっては、言語聴覚士が関わって指導に生かしているところもあった。
- ・外国籍の子供がおり、連携が難しい。
- ・地域によっては、特別支援研究会でどこと連携ができるかを話す機会がある。
- ・アスタ(発達障害支援センター)との連携もある。

事例検討「応用行動分析を取り入れたASDの生徒への支援」(中1女子)

事例提供者 三島市立北中学校 通級指導教室(LD等)担当

教諭 岩本康子

### ○事例検討で出た意見

話し合いの視点：生徒が教室内で静かに授業を受けるためにできること

本人へのアプローチ①〈自己肯定感〉

- ・得意なこと、やりたいことに取りくむ時間を作る。・楽しい時間を共有する。
- ・できたことを認め、自己肯定感を高める。周囲のAさんの見方を広げる。
- ・リフレーミングをする。
- ・通級を「安心できる場所」「私を見てもらえる場所」にする。

本人へのアプローチ②〈自己理解〉

- ・思うようにならないことを視覚化する。アンガーログを書く。負けじゃんけん。
- ・自分の心身の状態に気づく。→ストレッチや呼吸法を取り入れる。
- ・自分の得意なこと、苦手なこと、感覚過敏について気づく。→感覚統合
- ・自分の行動を自己評価してみる。
- ・気持ちの言語化→ヨシタケシンスケ『かくれてしまえばいいのです』

本人へのアプローチ③〈自己受容〉

- ・損得勘定を利用して、配慮されることで得することを知る。
- ・要求や助けを自分から出せるようにする。
- ・支援を受け入れる姿勢を育てる。

連携①〈学級・友達〉

- ・Aさんへの関わり方を知ってもらう。
- ・仲間を増やす。・座席の工夫。

連携②〈校内・教職員〉

- ・ケース会議等でAさんへの支援を共通理解する。
- ・クールダウンの方法や効果的な声掛けの仕方を共有する。
- ・Aさんの理解者を増やす。
- ・Aさんが支援を自然と受け入れられるような声掛け。×「特別扱いして欲しいの?」
- ・就学支援の考え方を見直す。

連携③〈外部〉〈保護者〉

- ・医療との関わり。薬についての正しい理解。
- ・SSWと協力しながら、保護者への働きかけを行う。
- ・保護者と一緒に通級を行う。

目標の見直し〈自己決定〉

- ・本人が困っていること、なりたい自分を話題にする。
- ・目標に本人の希望、思いを反映させる。



## 静東地区講習会報告

### 第1回地区講習会

① 日時 令和6年4月25日(木) 13:30 ~ 16:20

② 場所 沼津第五地区センター

③ 講習内容 ・ 講演「通級指導教室・静言研について」

講演者 三島市立南中学校 森田恵先生

・ 校種別講習会 「発達通級指導教室について」

富士宮市立富士根南小学校 青木達也先生

「言語通級指導教室について」

富士宮市立東小学校 花本佳奈先生

### <講演内容と感想>

・ 通級指導教室とは何か、法的根拠をもとに教えてもらうことができた。また、静言研について、これまでの歩みや今後の方向性について学ぶことができた。

・ 「発達通級指導教室」について、青木先生の実践例を交えた具体的でわかりやすい解説で、教室内での指導の流れやポイント、考え方等を学ぶことができた。新版LD・ADHDの心理的疑似体験プログラムは、実際に体験することができ勉強になった。

・ 「言語通級指導教室」について、富士宮東小の教室の様子や、具体的な児童の表れや指導の様子など聞くことができた。実際に指導の動画を見ることができ、参考になった。

・ グループワークでは、経験豊富な先生方の実践例や実際の教材を紹介していただき、教室の中での扱いや意味などについて知ることができた。



## 第2回地区講習会

① 日時 令和6年5月21日（金）10：00～16：30

② 会場 富士市教育プラザ 会議室

③ 演題 「子どもの行動の理解と対応」

講師 静岡県立吉原林間学園診療所 櫻井類先生

### ④講演内容、感想

ア 子どもの行動の理解のための3つの視点

イ ケース2例のアセスメントと対応

ウ よくある質問



「自分で自分をコントロールできる」自己効力感の向上をめざすことが、通級担当の仕事だと改めて実感した。私たちは学び続け、そうして得た力を子どもに還元していくことが大切。先生のこれまでの臨床から様々なケースを紹介していただき、それぞれのケースに対してアセスメントと対応を教えていただくことで具体的な子どもをイメージすることができた。また、多くの質問にも答えていただき、どの先生も、自分が担当している子どもを思い浮かべながら、今後の対応を考えられ、とても勉強になり、非常に実りある研修になった。

## 構音指導講習会①

① 日時 令和6年6月28日（金） 13：30～16：00

② 場所 富士宮市東小学校

③ 講習内容 ・講演「構音指導の進め方」

講演者 石井照代先生 元通級指導教室担当

東小学校ボランティアアドバイザー



### <講演内容と感想>

- ・ 構音検査、口腔機能の確認、発達や聴覚に問題はないかなど、構音指導に入る前のこどもの実態把握について、実態を把握した後の構音指導について、発音記号を元に講演していただいた。
- ・ 50音表をもとに、ひとつひとつの発音の舌の動き、口の動きを丁寧に確認し、お菓子を使った指導法など、指導の例を教えていただいた。
- ・ 「指導の引き出しを多く」「うまくいかないのは、指導者側の責任と考える」「子供とその時、その場を楽しみ尽くす」構音指導の基礎基本や、指導観の部分をお話で伺えたことは、とても有意義だった。
- ・ 一人一人の様子をしっかりと把握してその子に見合ったやり方を工夫して見つけていくことの大切さを改めて実感した。



### 第3回地区講習会

① 日時 令和6年8月20日(火) 10:00~16:30

② 場所 三島市北小学校

③ 講習内容 ・ 全体会  
・ 分科会  
・ 講演「発達特性がある子どもたちの育ちを支える

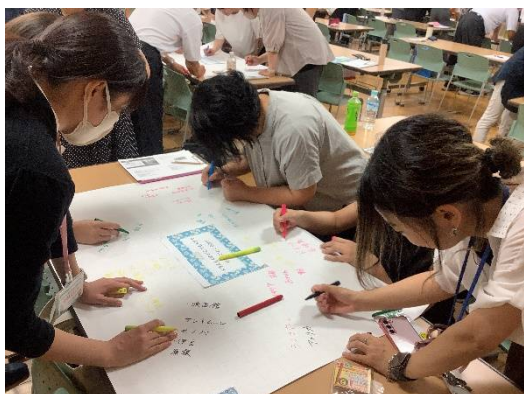
～保護者支援を視野に～

講師 臨床心理士・公認心理士 石川令子先生

### <講演内容と感想>

- ・ 小5の子の例を挙げていただき、背景を考える際に、偏った見方しかできておらず、根拠に基づいてとらえるために、自分の知識をどうつなぐればよいのかのヒントをいただいた。

- ・保護者対応の仕方など具体的に教えていただいととても勉強になった。また、自傷行為や自殺をほのめかすケースがここ数年連続していて、どのように対応したら良いのか正解が全く分からずにいたので、大変参考になった。
- ・回転木馬式のブレインストーミングが教室でも取り入れられそうで参考になった。臨床心理士のお立場からの話は、切実なものがあり、子どもからのSOSをしっかりキャッチして対応していかなければと気が引き締まる思いがした。また、「SOSを出す」ということを、小さいうちから教えていきたいと思った。



## 構音指導講習会②

① 日時 令和6年9月30日(月) 13:30~16:00

② 場所 富士宮市東小学校

③ 講習内容 ・講演「みみの教室の支援について」

講演者 大内伸枝生 元通級指導教室担当

東小学校ボランティアアドバイザー

・構音指導の進め方(実践編)

講演者 石井照代先生 元通級指導教室担当

東小学校ボランティアアドバイザー

### <講演内容と感想>

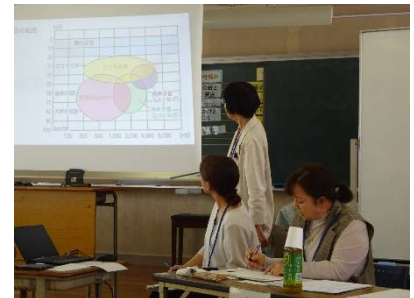
・難聴児についての基本知識、そしてみみの教室での支援について具体例を元に講演していただいた。難聴児は、生まれてから「聞こえた」経験が無い子が多いため、自分が困っていることに気付いていない子が多い。どのように聞けば聞き取れるのかを自分で理解することが、自分のきこえを知り、受け入れ、周りに伝えられるということが分かった。

・みみの教室で行っている「ききとり」の活動を子どもになりきって実際に行った。2方向から同時に聞き取ったり、雑音がある中で聞き取ったりすることは、意識をし

ていないと聞き取れないことが分かった。「もう少し大きい声で言って欲しい」「右側の人、もう少し小さく」など、自分が聞き取るための要求をすることも大切だと分かった。

・みみの教室での実際の指導の様子を動画で見ることができ、難聴児がどんなことが苦手なのか、どのように聞き違えるのかが分かった。

・静東地区会員の実際の指導の様子を動画で持ち寄り、どのような手立てが有効なのかを会員同士で様々な視点から考えることができた。



#### 第4回地区講習会

① 日時 令和6年10月31日(木) 10:00~15:45

② 場所 熱海市 南熱海マリンホール

③ 講習内容

・授業研 演題「読み書きが苦手な子への指導実践」

発表者 沼津市立第四小学校 LD等通級指導教室 山本 莉菜子 先生

・講演会 演題「子どもの身体感覚を高め 聴く力を伸ばすために」

講師 発達支援教室じゃんけんぼん 静岡福祉大学非常勤講師

夏目 徹也 先生

#### 〈講演内容と感想〉

・感覚統合について、それぞれの感覚がうまく働くとどうなるか具体的な実践例を紹介しながら話していただいた。

・通級指導教室担当者として、通級のあり方、指導内容など、指導者としての構えなどたくさん教わった。

・子どもができないと思うのではなく、自分の指導に見直すべき点があると考え、その子の本来の力を引き出すことができるようになって感じた。



## 静岡地区研修報告

### 第1回地区講習会「新任者研修」

- 1 日時 4月19日(金) 9:15~16:15
- 2 会場 静岡市特別支援教育センター
- 3 講習内容 講話 「静言研について」  
講師 静言研事務局長 青木 教美  
講話①「通級指導について」  
講師 清水直子 氏  
講話②「ことばの指導の基礎」  
講師 北野 市子 氏

#### <講話内容と感想>

「親の会」から発足し、どのような理念をもち、どのような経緯を経て、静言研ができたのかをよく学ぶことができた。

講話①では、静言研の理念と重なる保護者や教師の思いを学んだ。そして通級ではどんなことが大切に扱われているか、また、通常学級との指導の違い、通常学級と同じ熱い思いを感じ取ることができた。

講話②では、「ことば」の出どころである、「脳」の「つくり」につ北野先生より話をしていただいた。右脳と左脳では「言語中枢」の場所が主に左側にあることや、理解をつかさどる部位が右側にある人が多いなど、「ことば」がどのようにしてアウトプットされるのか学ぶことができた。

### 第2回地区講習会「構音指導研修」

- 1 日時 6月12日(水) 13:15~16:00  
9月25日(水) 13:30~16:00
- 2 場所 静岡市特別支援教育センター
- 3 講習内容 講話 「構音指導の基礎①②」  
「機能性構音障害(2)指導の実際」  
講演者 言語聴覚士 北野市子 氏

#### <講話内容と感想>

「器質性障害」や「運動障害性構音障害」など機能的な問題で発音が難しい症例や口腔機能について詳しくお話を伺った。また、「破擦音」「破裂音」「通鼻音」「摩擦音」の違い、「構音点」と「構音方法」について「国語標準音表記法による構音検査」の表を見ながら、口腔内の名称とともにどのように音にするのかを教えていただいた。実践あり、発表ありの充実した時間だった。「機能性構音障害」については、主に実践に役立つ内容が盛りだくさん組み込まれていた。北野先生は「構音障害をもつ子と同じ音が出せなければ、指導はできない。」と、話されていたが、その子をもつ構音方法や構音点が理解でき

なければ、どこを改善していかななくてはならないのかが明確にならないと感じた。構音指導は、「音を出す」よりも構音に必要な口腔機能である「かまえ」を指導者が意識し、さらに、子どもに意識させることが重要であるということを知った。また、構音検査表（単音チェック表）と人の横顔の形をした口腔機能の図が一致していることが、構音点や構音方法を探る大きなヒントになっていたことにも驚いた。「音」を出すことに苦手さをもつ因果関係は、構音検査表と口腔機能の図を一致させたことで原因が明らかになることがわかった。これも研修の大きな成果であった。

### 第3回地区講習会「幼児言語教室研修」

- 1 日時 令和6年8月6日（火）9:15～11:15
- 2 場所 静岡市特別教育センター3階 研修室
- 3 講習内容 「幼児言語教室のこれから」  
講師 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所  
研究企画部 主任研究員 谷戸 諒太氏

#### <講話内容と感想>

特別支援幼児教室における指導・支援の柱に「子どもの全体像を捉える」「こどもの自己肯定感を支える支援」「子ども・保護者・担任等の思いに寄り添った支援」を大切にしていこうと学んだ。

また、幼児言語教室の現状と課題についてお話を伺い、一人ひとりのあるがままの姿を受け止め、温かみのある言葉や態度で支援する大切さを再確認することができた。

### 第4回地区講習会「保護者支援について」

- 1 日時 令和6年8月29日（木）14:00～16:00
- 2 場所 静岡市特別支援教育センター 4階  
当日は天候不順のため、ZOOM開催を主とし、会場での視聴と合わせて実施
- 3 講習内容 講話「発達障害児を育てる保護者理解と支援者が大切にしたいこと」  
講師 発達障害児応援団 NPO ぱく 今泉依子 先生

#### <講話内容と感想>

自身の巡回相談員や発達相談員・スクールカウンセラー等として出会った保護者と子どもへの支援の経験から、支援者としてどのように保護者と発達に課題を抱える子どもへの理解を進めていくとよいのかについて、お話しいただいた。問題行動が表面化するときが「支援のチャンス」と捉え、発達の節目の時期を見逃さずに子どもに向き合うことの大切さを学んだ。また、保護者の思いも汲み取りながら応援団として支援を考えること、孤独にさせず伴走していくことの大切さを強く感じた。

### 第5回地区講習会「聴覚障害研修」

- 1 日時 令和6年 9月20日(金) 14:00~16:00
- 2 場所 静岡市特別支援教育センター
- 3 講習内容 「聴覚障害に関する指導・支援」  
「言葉を育てるには」  
講師 国際医療福祉大学 平島 ユイ子 氏

<講話内容と感想>

聴覚障害のある子どもの事例から、聴覚障害のある子にとっての自立と想像される困難さについて考えられた。言葉の発達の視点で、「聞くこと」と「話すこと」「考えること」等との深いつながりについて学んだ。「自己理解とはいうもののすぐにはできるほど簡単なことじゃない」「難聴だから配慮してくださいでは、周囲はどう配慮したらいいかわからない」「お礼を言うことは周囲の協力者を作ること」等、何らかの困難さを抱えた子どもの自立を考えた時、通級担当者が心にとどめたい見方についてご教授いただいた。聴覚障害のある子や何らかの困難さのある子の心の声を聴くための知識や想像力を広げる機会となった。



## 静岡西（志太・榛原）地区講習会報告

### 第1回地区講習会（新任者研修会）

- ① 日時 令和6年5月15日（水） 8:45～11:30  
② 場所 焼津市立大井川南小学校  
③ 講習内容 講演 「言語指導について」  
講演者 夏目孝子 氏（言語聴覚士）  
講演 「困り感のある子どもへの指導について」  
講演者 夏目徹也 氏（発達支援教室じゃんけんぽん）

### ④ 講習会の様子



### 〈参加者の感想〉

- ・今日は来て、本当によかったです。今までやってきたつもりでしたが、全然足りないと思いました。本をもう一度よく見て「ここがわかりません。」と聞けるようになりたいなあとと思いました。まず、検査用紙をうまく使って分析することで、理解を深めたいと思います。（言語）
- ・構音検査方法についても、今日初めて教えていただいたことが多く、「サ行はス音から」「うがいでカ行音は出したらダメなこと」など、目からウロコでした。先生にはまだまだ教えて頂きたかったです。（言語）
- ・感覚の面からくる困り感と、それを養うための活動や教材など細かく具体的に教えていただき、「早速明日からやってみよう！」と思える内容が多くありました。担当する子の顔を思い浮かべながら、この子が困っているのは、この感覚が弱いのかかもしれない、と子どもの姿から考えることができ、大変勉強になりました。（発達）
- ・夏目先生の講話の中で、子どもに必要な力が子どもの言動にどう生きているのかがよくわかり、指導のねらいがより深まると感じました。「在籍学級」「家庭」と、子どもを見取る場がたくさんある中で、子どもの本当の困り感を見つけ、学習に取り組みせていくことが通級の役目だと感じました。それが実践できるよう、日々自分自身が学び続けたいです。（発達）

## 第2回地区講習会

- ① 日 時 令和6年7月5日（金） 13:30～16:20  
② 場 所 牧之原市立相良小学校  
③ 講習内容 講演 「特別の支援を必要とする児童生徒への接し方」  
講演者 星槎大学大学院教育実践研究科 教授 岩澤一美 氏  
④ 講習会の様子



相良小校長挨拶



講師自己紹介



講演会



情報交換

### 〈参加者の感想〉

- ・一つ一つの話が具体的で、とても引き込まれました。子どもの様子を見て、今何が必要か、どのような対応をとればいいのかの引き出しをたくさんもっている岩澤先生は素晴らしいと思いました。岩澤先生のセミナーに参加し、特別支援教育の理解を深めたいと思いました。（発達）
- ・本当はお答えしにくい我々の事例に関わる質問に対しても、有益な情報を教えていただけてありがたかったです。最近の講演の中で一番良かったです。続きのお話をまた聴きたいです。（発達）
- ・どの学級でも起こりうる行動をどのような支援で対応していくのかとても分かりやすいお話でした。通常学級の先生方にも聞いてほしいお話でした。（言語）
- ・具体的なエピソードを交えてお話くださり、とても分かりやすく聴くことができました。行動観察では、子どもを一方向だけから見るのではなく、立体的存在として見ることの大切さや、その子どもがどんな認知のタイプなのか見極める大切さが分かりました。力量をつけていきたいです。（言語）
- ・たくさんの具体的な支援の方法を教えてくださいました。講話だけでなく、質疑応答の中でも、それはこういうことが原因だと思うから、こういう手立てがいいよと分かりやすく教えていただきました。頷くところが大変多く、とても勉強になりました。（幼児言語）
- ・具体的な例をたくさん聴くことができ、あっという間の時間でした。子どもをよく見る目を養わなければいけないと感じました。（幼児言語）



### 第3回地区講習会

- ①日 時 令和6年10月30日(水) 8:45~11:15  
②場 所 島田市立島田第四小学校  
③講習内容 講演 「WISC-V～結果から手立てへ～」  
講演者 公認心理師 曾根公美子 氏  
協議 「講演内容(WISC検査の結果活用)について」  
「日常の指導での困りごと」等

#### ④講習会の様子

##### 〈講演内容〉

##### WISC-Vの概要とWISC-IVとの相違点について

- ・指標は4個から5個へ。「知覚推理」が、『視空間』と『流動性推理』になった。
- ・「ワーキングメモリ」が、『聴覚的短期記憶』と『視覚的短期記憶』の両方を測れるようになった。

##### 結果の解釈・支援へのつなげ方・具体的な支援例(通級での支援)について

- ・各指標の結果をもとに子どもの強みを活かしながら弱点を補う支援計画を立てる。
- ・学校・保護者と協力する支援を行うことが子どもの汎用性を育むことにつながる。

##### 〈協議〉

##### 話し合いで出た意見

- ・流動性推理の能力を育む指導教材として『わたしはなあに?カードゲーム』がある。
- ・言語理解の指標は低くはなく、日常会話はできるが、学習言語が入りにくい児童生徒の指導はどうすればよいか。⇒アドバイス;わからない言語は、その都度子どもが理解できる言葉に言い換える。その繰り返し。ヘルプが出せるようにし、わかったふりをさせない。

##### 〈参加者の感想〉

- ・WISC-Vの概要が理解できて、すっきりしました。それぞれの指標についての説明はもちろんですが、どんな指導が効果的か具体的に示していただいたのも、とてもありがたかったです。子どもたちの検査結果を見直して、指導を振り返りたいと思います。
- ・近年、医療機関での発達検査では、WISC-Vを受けるケースが多くなってきているので、とても良い講演内容でした。5つの指標の見方、予想される困難とそれに対する支援策を、大変わかりやすく話していただき、参考になりました。WISC-Vに対する興味がすごく増しました。



## 静西（小笠）地区講習会報告

### 第1回地区講習会

(1)日時 令和6年4月16日（金）10:00～16:30

(2)場所 小笠教育会館

(3)内容 テーマ「つなぐ～通級担当の専門性と心意気」

①全体会（今年度の組織・年間計画・教室紹介）

②分科会（講話と意見交換）

・幼児部会「担当として心がけてきたこと」掛川市幼児ことばの教室 松浦陽子

・学齢部会「担当として心がけてきたこと」御前崎市立第一小通級 櫻井弘幸

※地区会員を講師として講習会を開催した。

通級担当として必要な心構えを、具体を通した話から学ぶことができた。

### 第2回地区講習会

(1)日時 令和6年5月16日（火）13:30～16:30

(2)会場 掛川市生涯学習センター

(3)内容 幼児・学齢に分かれて話し合い

・幼児 就学支援にむけての園との連携について

・学齢 中学通級や小中の連携について事例報告

※就学支援や通級担当の見立ての大切さについて事例をあげて話し合った。

新たな担当も増えているので、子どもを見立てる力を高め、幼児担当と学齢担

当との情報交換が子どもたちのよりよい支援につながっていると感じた。

### 第3回地区講習会

(1)日時 令和6年11月30日（土）9:15～11:30

(2)会場 静岡県総合教育センターあすなろ 講堂

(3)内容 講話

演題 「作業療法から見た様々な行動の解釈と支援」

講師 聖隷クリストファー大学

リハビリテーション学部作業療法士学科 教授 伊藤 信寿 氏

※気になる子どもの表れは、「感覚の発達の不成熟さ」が原因の一つにあることを念頭に入れて関わることや発達の基盤を整えるために、幼少期から「運動・主体性・楽しさ」を大切にして支援することがとても大事だと確認できた。今回は、幼稚園や保育園担任がたくさん参加し、共に聴講できたことがとてもよかった。

### 第4回地区講習会

(1)日時 令和6年12月16日（月）13:30～16:30

(2)会場 小笠教育会館

(3)内容

①今年度の反省、来年度の組織、年間計画

②講話 「WPPSI-Ⅲ検査でわかること」掛川市幼児ことばの教室担当 小林満里子

③幼児と学齢に分かれて教室運営や指導についての意見交換

※幼児担当の地区会員から検査の読み取り方を、事例を通して学ぶことができた。検査結果を指導に生かしていく力が、通級担当には常に要求されているので、大変参考となった。

## 浜松地区講習会

### 第1回 地区講習会 「構音指導を楽しむ会（全2回）」

- ① 日時 令和6年 4月27日（土） 9：30～11：30（第一回）  
令和6年 6月15日（土） 9：30～11：30（第二回）
- ② 場所 第一回…浜松市立気賀小学校、第二回…浜松市教育センター
- ③ 講習内容 第一回…構音指導の基礎知識について  
第二回…発音指導の進め方について  
講師 浜松市立北浜小学校 教諭 白井有希乃先生

#### <内容・感想>

初めて「ことばの教室」の担当者になった先生方に対して分かりやすく、実践的な研修会となるように全二回で実施している。講師は2回とも浜松市立北浜小学校の白井有希乃先生である。第一回では、構音指導の基礎知識について白井先生より演習を交えて教えていただいた。後半では、グループになって指導で使える教材を体験しながら交流をした。第二回では、発音指導の進め方について、カ行やサ行の構音指導プログラムを例にどんな順番や方法で指導を組み立てていくのかを演習を交えながら学んだ。基礎的な指導方法をとても分かりやすく教えていただけなので、新人担当者にとって、大変心強い研修会となっている。



### 第2回 地区講習会

- ① 日時 令和6年 7月6日(土) 9：30～11：30
- ② 場所 浜松市教育センター
- ③ 講習内容  
講演 「得意なところは伸ばし、苦手なところは補いましょう part2  
～得意と苦手の神経心理学的なアプローチから～」  
講演者 浜松学院大学短期大学部 教授  
幼児教育科長(兼)子どもの未来創造センター長  
志村浩二 先生(臨床心理士・公認心理師)

#### <講演内容と感想>

ASD(自閉スペクトラム症)の5つの特異性について、軽妙な語り口で、実演を交えながら、詳しく講演していただいた。

特異性の1つ目は、感覚の特異性についてである。自閉症ではない人にとっては平気なことでも、自閉症の人にとっては、耐え難い苦痛や痛みとなって感じる時があるということが、よく分かった。また、自閉症の人は、斜めに見ることや回転刺激などを「心地いい」と感じることで、それが人への関心よりも強くなり、コミュニケーションに問題が生

じるということも分かった。

2つ目は、運動の特異性についてである。自閉症の人のジャンピングや回転などの自己刺激行動に対しては、周りの人が波長を合わせ、コミュニケーションをとることが大切であることが分かった。

3つ目は、人への関心の特異性についてである。三項関係と共同注視の欠如がクレーン現象につながるということが分かった。クレーン現象がある場合は、されるがままにするのではなく、誰かの手を使うためには、その人の理解が必要であるということを繰り返し伝えていくことが大切だと思った。

4つ目は、意味（理解）の特異性である。「どんより」という言葉を使って文を作るとき、「今日の天気はどんよりしている。」ではなく「うどんよりそばが好き。」というように、言葉の意味（了解）が欠損しているため、コミュニケーションに問題が生じることが分かった。

5つ目は、認知の特異性についてである。自閉症の人は、カレンダーボーイや駅名少年のように、見た物を写真のように記録することができる一方、時間感覚が分からないため、フラッシュバックやタイムスリップを起こしやすいことが分かった。

自閉症の人と関わる時、周囲の人が、特性を治すのではなく、特性を理解して調整することが大切であるという言葉が、特に印象に残った。自閉症の人と関わる際には、教えていただいた5つの特性を理解し、同じ目線に立ち、温かい関わりを作っていきたいと思った。

愛着障害の子どもに対しては、Real Person（現実の人）が、広く浅く肯定的に関わる大切であることが分かった。学校現場では、1対1ではなく、複数の教員が肯定的に関わることで、家庭では得られなかった信頼感やこんな人になりたいという目標をもつことができるという言葉が印象的だった。

記憶力が弱い子どもに対しては、短期記憶を倍加する役目をもつワーキングメモリー（作業記録）を増やすことが大切であることが分かった。周囲の大人が、1日10分でも、その子の好きなこと得意なことの話をじっくり聞き、褒めたり認めたりすることで、ワーキングメモリーが増え、長期記憶に残りやすくなるということは、驚きだった。

とても楽しく、あっという間の2時間の講演だった。今回学んだことを、今後の通級指導に活かしていきたいと思う。



第5回 地区研修会（利任市研修）



- ① 日時 令和6年7月17日(水) 9:00~12:00
- ② 場所 浜松市教育センター
- ③ 講習内容 講演「静言研について」  
講演者 浜松市立北浜小学校 白井有希乃 先生  
※各教室でDVD視聴(講師 根木明子先生)  
担当者による話し合い「仕事の分担について」

<講演内容と感想>

白井先生より静言研の歴史、組織運営、目的、事業、関連団体等についての話を伺った。「静言研について、今までのやり方と変わったところなども含めて詳しく知ることができてよかった。先を見すえた日々の活動、記録をしていくようにしていきたい。」という感想が聞かれた。

仕事の分担の話し合いについては、今年度新しく、各学校で仕事を分担するようになった。分担された仕事についての懸案事項は、全体で話し合い、共通理解した。

新任者研修は、根木明子先生の講話が入ったDVDを配布し、各教室で必要に応じていつでも見返せるようにした。

#### 第4回 地区講習会

- ① 日時 令和6年 9月7日(土) 9:30~11:30
- ② 場所 浜松市教育センター
- ③ 講習内容 講演「発達性吃音臨床の理論」  
講演者 聖隷クリストファー大学 教授 谷哲夫 先生

<講演内容と感想>

1. 吃音とは
2. 発達性吃音の進展
3. 吃音と自己肯定感(自尊感情)
4. 吃音児との対応

『吃音児の不安を軽減し、心理的な幸福感を向上させる治療を行っても、吃音の重症度は軽減されないことがある。家族、親族(両親の祖父、祖母)に吃音歴がある場合、改善は困難。脳の構造的な特異性、あるいは遺伝。低学年までは改善を目的とした治療は意味があるものの、小学3年時点で吃音を伴う場合は成人まで持続する可能性が極めて高いため「楽にどもること」を目的とする。』というお話が、とても参考になった。おおよその目安として理解しておくことが必要であると思った。

また、「吃音を負の要素として意識し始めた年齢は、6歳から15歳」と、小中学生の時期となっているため、その間の支援が大切であると感じた。事前に周りに理解を深めたり、自信をもつものをもたせたり、どもってもよいことを伝えたりすることが大事なことが分かった。周りで関わる人が、ことばが出るまで待ったり、ゆっくり話したりすることが大切なこ

とも理解できた。  
今後に生かしていきたい。



#### 第5回 地区講習会

- ① 日時 令和6年 10月5日(土) 9:30~11:30
- ② 場所 浜松市教育センター  
Zoomでの配信も実施。
- ③ 講習内容 講演「ビジョントレーニング 体験してみませんか」  
講演者 コンテ代表 桐生大輔氏

<講演内容と感想>

・今回は、まず視覚に関する基本的なことを凝縮して講演していただいた。



その後はビジョントレーニングを行う教材教具の実物を用いて、使用目的、使用方法を教えていただいた。



木の上を  
歩かせながら  
.....



見ないで同じ  
形をさがさせ  
ると.....

通り説明していただいた後は、グループごとに実物を見せいただき、使用させて

いただいた。どんな子どもに、どんな風に使用できるかを体験しながら勉強することができた。

・実物を使い、自分たちで実際に体験したので、子どもの姿を思い浮かべながら体験することができ、すぐにでも指導に使えるものがたくさんあった。

## 第6回地区講習会 Chromebook 研修会

① 日 時 令和6年11月30日(土) 9:00~11:00

② 場 所 浜松市教育センター

③ 研修内容 ICT研修

講師 浜松市立神久呂中学校 教諭 近藤 充 先生

### <研修の内容、感想等>

浜松市内の学校で児童が使用しているクロムブックを使用し、FigjamとGoogleスライドの使い方を教えていただいた。Figjamでは、Jamboardとの相違点や基本操作方法を教えていただいた。Googleスライドでは、教材を作成する中で、音声ファイルやリンクの挿入方法などを教えていただいた。

また、通級指導に使いそうなWebアプリもいくつか紹介していただいた。例えば「eTeachers」は、Web上で利用できるデジタル教材サイトで、小1~6年の様々な教材があり、無料登録でフラッシュカードや基本問題フォーム集が利用できる。

学校での研修会は学級での一斉指導向けの内容になることが多いので、このような機会に通級指導向けの研修が受けられることは大変ありがたい。通級担当同士の情報交換の場としても貴重な時間であると感じた。



## 編集後記

令和6年は新型コロナウイルス感染症の影響がほぼなくなり、それ以前の生活が戻ってきた、という印象の年となりました。この数年の経験を踏まえ、新学習指導要領で示されている内容が浸透してきたことで、学校での学習指導方法が変わってきていると感じます。GIGAスクール構想を実現するためのタブレットの配置や「個別最適化」の実現が謳われ、通級指導教室に通う児童生徒にとって学びやすい環境が整いつつあります。

新しいものが導入されるということは、我々指導者にとっても、研修が必要になります。対話重視の活動に対応するために、どのような話し方を身に付けさせるとよいのかを研修することや、配置されたタブレットを子どもたちが有効利用するためには、どのような技能が必要であるかを知る必要があります。また、通常の学級での個別最適化の促進のためには、目の前の子どもにとっての最適は何かを知ることが必要になり、私たち通級指導教室の指導者はその方法を研修していくことを求められます。そして、それを保護者、本人、在籍校へ伝えるための方法についても、高い技能が必要になります。

これらのことから、本会の地区講習会、定例研修会での研修は、会員の知識技能を向上させるために必要不可欠なものであると感じます。

定例研修会で行われる分科会の内容がこれまでと変わったことも大きな前進です。第1回の分科会はこれまでと変わりがないものですが、第2回は言語・発達の垣根を越えて、研修することができる内容となりました。本研究会の定例研修会の意義として、静岡県内の多くの先生方と交流する機会をもつことが挙げられますが、今後はさらに多くの方々と共に研修する機会が増えるのではないかと思います。

これ以外にも少しずつ変化がある本研究会ですが、よりよい指導をするための研修を積む、という姿勢はこれまで同様に持ち続けていきます。そして、前に進むために必要なことであれば、怖がらずに変えていく姿勢も持ち続けたいと思います。

今後も子どもたちのために、静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会へのご協力をお願いいたします。

研究部 白井 有希乃、福元 義孝、南谷 由香

